

四
十

俳風

柳多留

入編

9
1147
5



Handwritten text in cursive style, likely a signature or a note, located at the top of the right page.



十四
Handwritten characters on a small slip of paper, possibly a page number or a reference mark.



十四丁と廿七丁とハ元刊本小
存り句を分載
後刊本小削除せる
よりのり



近江
初津の
山橋



けのろくおとんと唐江を津よ
 左の坊多馬一宗くうんか途
 してはるかちよごちひつらむは
 けき念の目さしきよひかーと
 乳母が虫のやーごぶせのあれる
 せうご航者と空場へのーと空
 敷入の妹とつこふはいつく居は
 お糸ごんこーよちく居くを乳母よ
 毒ごそふ鼻の先きのハシひおくー

若き福らうやうとあらうことあらうと
仲人もあしとくといふ男なり
うそとけいしめがさうとす敵と
ぞう無ハ又母身一こと後之身
まをせハハかこいご知れくけしき
らく申ハおとれと見せぬあ
大文の忌々目もだ一とさうさ
入玉おと見物巻へたうり
おしとくおとれと見せぬあ

おま夜に眼く娘の文す
之舎りお府の下へおあ家
知しうとある田ちとわ儀
何事ぞお山何とやいおちり
吉日がをきてねをわいて
計賣のしとる後おとさう色
おしとくおとれと見せぬあ
伝長おあまのぶと中
おしとくおとれと見せぬあ

わらわらふらだきしし強入にほれり
里の母發とほしきしきし
しきしきしきしきしきしきし
森くす村ぐもつ物かせく
長崎とルッ部でいしきしきし
西筆がきしきしきしきし
決地のもくしきしきしきし
姉せししきしきしきしきし
きしきしきしきしきしきし

十四

しきしきしきしきしきしきし
下向おらららららららららら
居つちとしきしきしきしきし
芝居とむしきしきしきしきし
きしきしきしきしきしきし
きしきしきしきしきしきし
きしきしきしきしきしきし
きしきしきしきしきしきし

ふん〜と字が〜で居る道〜の
〜と字が〜の字〜の字〜の
辻番の奥のふ〜戸ときくは〜
中〜で海〜の〜の〜小侍
〜の〜の〜の〜の〜の
かげ海老尾の〜の〜の
〜〜〜〜〜の〜の〜の
大三十日廿九日〜
〜〜〜〜〜の〜の〜の

御書

此居の廿二日〜
中の丁〜
〜の〜の〜の〜
御書〜
〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜

あつて金持の如くはのこりくら
を新でめづむすむれつふらうむ
信ふものぞんかんのよみし
志あがしむと勝とむむしうづも
人がしへんまかーく
ちんよせぬ向ふへ城まへ南田川
あひれ道かきり子とまひすの代
岩壁へ白く伸人あひらき
合屏風しむしむの目せり

柳十九

ちんでる遠くへ山合のまゝあん
津あまふしとく〇く庵とむ
下ヶ敷とむ歩おら海へは巻をひ
本末屋びぢんのまゝくおむ
らうと海へは海のあつていふまゝ
おはるがらうへあがらる海へ
後段のまゝと押戻と二日の金
沖程をらうらういへあらう
うぶいへは海へは海へは

源一ち一なる者。此のこ人
多とつげく酒屋のりせしけり
此手ざりの礼とせむとぞぞせり
世居ハせむとの内へ出とせり
つゝ世居のときをこきこひ
死教と他人てせむふあとの
鈴がーいもむの底がすくさく
以中入は石の何にらつゝあひり
此初ま人とせむもまのこひ

柳千

よらの者いふとせむハも一
無新ハハなるのあつゝち
あてあももせむとせむ
世居あぞよとせむ
あそとせむとせむ
相取り見ぬが海けくちら
七のあももせむとせむ
市の住むちのちとせむ
ちぞせむとせむとせむ

とくしんらんの人んくさめりやん
いざしん下目とちりりこちりり
栲紗のいよあひらちりりよすきり
毛連りし出るはらよあひりり
武安のいよ減くす実の便の代
あせくはく見ること大料さこち
本戸書の内いあせくびすあひりり
牛養のい子拾り人さりりりり
吸つちりりりりりりりりりりり

とくしんらんの人んくさめりやん
いざしん下目とちりりこちりり
栲紗のいよあひらちりりよすきり
毛連りし出るはらよあひりり
武安のいよ減くす実の便の代
あせくはく見ること大料さこち
本戸書の内いあせくびすあひりり
牛養のい子拾り人さりりりり
吸つちりりりりりりりりりりり

妹のえすくおいづく一筆のふへ
おやの亂を大伴河原のほそく
冷と居いりつさくさくか市お堂
あかく居あきし見せらるひら
下共の荷もゆじんとかちて敷入
ろしを湯敷をんやが紙皮を
あぢあんと娘のよきうしそく
死あるといづくもなをさ
あしし道しむかひと川やあ

甲戌

過洞庵ととつげそ思ふ
三つりの海、豊かのあをさ
此若例うんが昔のほおん形ん
真つ目の十九のけのむいしあり
風ふせぐおし一彼あり合展風
さししと又このほりとしあを
帳のらつとと根の敷し入
仲系へ休おはるきし男形
琴若とよしとでゆすす十日

ゆかしの舞 踊り 舞と踊り 踊り
まららむく 舞と踊り 踊り
まららむく 舞と踊り 踊り
音ねくも 舞と踊り 踊り
小まぬら 舞と踊り 踊り
根さきら 舞と踊り 踊り
琴のつご 舞と踊り 踊り
すのひら 舞と踊り 踊り

晴虎

はあ 舞と踊り 踊り
あゆみ 舞と踊り 踊り
井戸が 舞と踊り 踊り
大根た 舞と踊り 踊り
おひら 舞と踊り 踊り
おひら 舞と踊り 踊り
大二十 舞と踊り 踊り
あゆみ 舞と踊り 踊り
おひら 舞と踊り 踊り

ふぐりより金粒印をぐ牛の身
流川へ流すこと後の所迄りし
通り者おびさるるまゝくまなく見入
出合茶屋とのぶが是のりしもの
おびらせせぬもむね湯のこし
る男とけおくお持入おげこり
甲州を新やあへぬるもの
知高のまゝるるのちげくさ
相傳うだんでこりまゝのりし

お目色の仲人ゝ実らゆき
おこががり年ごと毎高流とあか
離りけよ路に一日里入りけり
まゝの心のむらあはちんてま
あへおつて浮舟をこるも右なる
政りゆき人実りてあはれ田川
病の肉よりおせくとしつたれ
先まぐいせんこがひまをてと
雲のまのまゆりてまの

草房の教書とていふこと
著述するところの
流石なるものなり
よーと云ふこと
なげに云ふこと
くらゐよくある
兩年きつひ

111

らんからさか
里の母とていふこと
高橋とていふこと
想ひのついで
くらゐ茶や
琴の拍とていふこと
小使とていふこと
西んぐらとていふこと

丁二日 水もよのへまきしあは
ちあらしんがく切りのちこく
タすもらげらふねしこぬか
赤川の橋と紙スのハムさしや
馬ぐあうのぐよめんかこも
おろしつゝ名つゝ鬼すま
たのこ子ハ痛くはつゝ匠
之の糸のタくれ中の町
河さ出こく名もてあらま
あ

神お世あらしと見くれをま
屋の舟一よこむがけり子
見くらつゝやまてつゝとお
いくらつゝまんとちちを
中谷もや小紋ありあ
石巻ハち場のつゝおとし
貝殻つゝたしちを代
丸つゝいとつゝつゝつゝ
あはらしんがく切りのちこく

死くもく二人をばらておえし
ひよひのまののいし柿屋のふん
板敷しとみくじりひい二人あり
たし日そんく病かひとれい
もふおつくち中ぶとねあがり
たでせくとしとくもく幕の田
見世の流あくふとしと仲人
しつてもある寝金のいじん
こしぐい今小毛清とまはる

清三丸

いのおるちお氣がわるいと茶屋
夜つびい地をの舞を結つ
離りれむあそぶ合つと笑小出
はつとてなつとあつとく
おのちもて結つとあつとく
あそぶと見しはつとあつとく
あそぶと見しはつとあつとく
あそぶと見しはつとあつとく

片眉毛かしくんとぬハもてふい
 船底ハ男どつりりと八日あざ
 勤高のおきまであがるふんこ
 出らんやくぬきぬけら後の音
 こじしの泣ぎん小沸く浪ざる
 らうわいのえハゆきとよくとら
 一生の款と目せくつりのり合
 知る人ふゆかすくするぜん
 明和七庚寅孟獲吉辰

押翠三

○俳諧風書品目録 江群上野 花屋善次郎

俳風柳栲捨遣十冊 川折点 柳代名

同川傍柳 古川折点 柳代名

同折白程篇之通稿篇 江戸五文字折白類是者

同第百十 此又手抄も此の年 倉家

同第百十 此又手抄も此の年 倉家

俳諧 此又手抄も此の年 倉家

